

# プロー『田園建築』と『装飾農園』

## ——庭園と農業の関係をめぐって

### Combining Garden and Agriculture : *Rural Architecture and Ferme Ornée*

今 村 隆 男

Takao IMAMURA

(和歌山大学教育学部英語教室)

2018年10月22日受理

#### Abstract

In the late eighteenth century an architect John Plaw published two so-called pattern-books, which are *Rural Architecture; Consisting of Designs, from the Simple Cottage, to the More Decorated Villa* and *Ferme Ornée; or Rural Improvements*. In both of these pattern-books Plaw tries to introduce agriculture into landscape garden, the relationship of which were often discussed in his days. Especially his second book proposes many types of building which are used for agricultural production and can be included in pleasure garden with their ornamental appearance. This paper analyses these pattern-books and concludes that Plaw's intention is not only for show but he attached great importance to the practicability or utility of his proposal of "ferme ornée" as a farm, and that the exterior and backdrop of the drawings of his building is much influenced by the picturesque movement which urged the union of utility and beauty.

#### 序

「装飾コテージ(cottage ornée)」とは、18世紀のイギリスにおいて富裕層によって領地の庭園内に娯楽のために建てられた非実用的なコテージの呼び名であるが、類似した名称を持つものに「装飾農園(ferme ornée)」がある。いずれもフランス語風の言葉ではあるが、イギリス人が考案した造語である。前者がイギリスの風景庭園と労働者のコテージとの関係を探る手がかりであるのに対し、後者の「装飾農園」は庭園と農園との関係を考える際の手がかりとなる。両者共に時代の流れの中で消滅、あるいは改築や改造が行われて現存するものが少ないため、その実態を調べるには当時の文献に頼るのが最も有益であり、資料となる文献としてはいわゆる「パターン・ブック」と呼ばれる、18世紀から19世紀にかけて出版された解説付きの建築提案書が挙げられる。本稿では、この「装飾農園」に焦点を当て、その実態を示す一つの例として18世紀末に出版されたプロー(John Plaw)のパターン・ブックを取り上げ、この建築家が農業をどのように庭園に導入すべきであると考えていたのかを探ってみたい。

#### 1.

プローは最初のパターン・ブックとして『田園建築(*Rural Architecture; Consisting of Designs, from the Simple Cottage, to the More Decorated Villa*)』を出版しているので、まずこちらを一瞥しておきたい。

著者プローは、18世紀後半の湖水地方へのツーリズムが隆盛した時期に、ウィングミア湖のベル島(Belle Isle)に、ノッティンガムの商人イングリッシュ(Thomas English)のために別荘を建てたことで有名な人物である。1785年に出版されたこのパターン・ブックの口絵には、この別荘を遠景に臨みながら会話する2人の女性が描かれている。その構図は典型的なピクチャレスクの風景の構図あって、この出版年がピクチャレスク趣味の最盛期であったことを物語っている。

『田園建築』で提案されている建物の中にはこのベル島のヴィラと同様に、当時としては斬新な円形のデザインを持つ、外観を重視したものが多い。ベル島のヴィラは3階建て、1階だけでも書斎、応接間、接客用食堂、玄関ホール、物置部屋などを備えており、プロー自身はそれが「簡素(simple)」であると言っているが、富裕層向けの豪華な建物であることは間違いない。本書に収められている提案は、その多くが富裕層向けの比較的大きな建築物である。

『田園建築』は図面が中心で、各々に極めて簡単な解説が付されているだけであり、著者の建築観は主に図面から解釈するしかない。図面は庭園の装飾用「ハーミテージ(Hermitage)」や「ゴードン公爵のためのコテージ」(PLATE I)、つまり装飾コテージに始まり、ヴィラや農場などのより大規模なものへと進んでいる。表紙にはこの本の価格が2ギニーと高額であっ

たことが書かれており、建物の解説よりも長い予約申込者のリストがあることから、この本が専ら美観にこだわる建物を領地内に建てようとする裕福な地主紳士のために書かれたことが想像できる。図面に描かれた殆どの建物は左右対称の古典的様式であることから、華美な装飾性を排したシンメトリーを特徴とするその建築様式が著者の言う「簡素」さであったと考えられる。大きな建物の場合に使用人のスペースをどこに取るべきかなど所有者の側にとっての説明はあるが、居住者に「簡素」な生活が求められるなどといった視点は全く認められない。

いくつかの具体例を見ておきたい。コテージにしては立派なプレート 6 (PLATE VI) の「コテージ、もしくは狩猟用ロッジ」の立面図は、正面と背面の両方から描かれている。これはこの時代のパターン・ブックでは他に例がなく、建物の外観がいかに重視されていたかを物語っている。また、これよりも大きな建物では、殆どの立面図は背景も含めて一つの風景として描かれている。例えば、プレート 7 (PLATE VII, 図 1) の「大きなコテージ、もしくは農場家屋」では、建物の 2 階の屋根にかぶさるように豊かな枝を伸ばしたオークと思われる大木が右側に描かれている。幹は節くれ立って曲がりくねっており、左側の小さな木と併せてサイド・スクリーンをなし、オークの背後に見える農場のゲートが風景の奥行きを示していることとも含めて、全体が典型的なピクチャレスクの構図となっている。これらの図面は、著者の視点が労働者ではなく所有者のものであったこと、その所有者の関心は居住性ではなく建築物やその周囲の風景の美観にあったことを物語っている。プローの立面図では、建物は左右対称性を柱とする古典的様式によって、一方で周囲の風景は規則性を嫌うピクチャレスクの美学によって、即ち本来は相容れない二つの様式を同時に用いることによって描き出されており、彼が古典的建築美をピクチャレスクの風景に適合させようと考えていたことがわかる。



図 1 PLATE VII

『田園建築』は、それまでのパターン・ブックと比較し、小規模な建物も含んでいる点や、多様な図面によって建物の外観に焦点を当てている点などにおいて刷新的なものだったが、そのほかの特筆すべき特徴として、銅版画の凹版技法であるアクアチントを図面に使ったイギリスで初めてのパターン・ブックでもあった。ピクチャレスクの旅行記で有名なギルピン (William Gilpin) が『ワイ川観察紀行 (Observations on the River Wye)』に含めたスケッチにおいてこの技法を使ったのは、プローの 2 年前の 1783 年である。プローにおいても、アクアチントの使用は風景の光と影、三次元的な奥行き、植物の触覚的な特徴などを描き出すことを可能にし、それがピクチャレスクの表現の導入に繋がっていると言えるだろう。

## 2.

『田園建築』の 10 年後の 1795 年に、プローのパターン・ブックの第二作『装飾農園 (Ferme Ornée; or Rural Improvements)』が出版されている。「装飾農園」は、“pleasure ground”である庭園と農園を兼ねた空間で、イギリスにおいて主として 18 世紀に造られた。「装飾農園」という言葉をイギリスで最初に使ったと言われているのは 1733 年に出了ウィツァー (Stephen Switzer) の庭園論で、それから間も無い時期にサウスコート (Philip Southcote) が最初の実際の「装飾農園」と呼べるウォバーン (Woburn Farm) を造っている (Archer 679, Sayre 190 n)。おそらく最も有名な「装飾庭園」と言えるのが、シェンストーン (William Shenstone) のレゾッズ (Leasowes) であるが、18 世紀半ばに造られたこの時期の「装飾農園」は、実用性や生産性はあまり考慮されない一種の「フォーリー (Folly)」に近いものだった可能性が高い (Sayre 171)。

しかし、庭園における農業の意義が無視できない問題であったことは、わざわざこれらの庭園の名称に「農園」という名前が付けられていたことが示しているだろう。産業革命が始まるまで農業は主幹産業であって、庭園の所有者の経済力は農業に依存していたことは間違いなく、領地に広大な庭園を造ることが流行したこの時代、庭園と農園の関係を領地内でどのように保つかは現実的に重要な問題であったと考えられる。

農業を庭園へ取り込む際には、二つの方法があった。風景庭園が大流行したイギリスにおいて 1780 年ごろまで一斉を風靡したケイパビリティ・ブラウン (Capability Brown) は、園内に植林の森を人工的に作ることで農地をその向こうに追いやって隠してしまったことが知られているが、他の多くの 18 世紀庭園においても農業生産性は表に出すべきではないものだったと言える。メイスン (William Mason) の『イギリス庭園 (The English Garden)』の最終第 4 巻 (1781 年出

版)には登場人物のアルカンダー(Alcander)の庭園が描かれており、これもまた明らかに一種の「装飾農園」であると言えるが、ブラウンと共通点が認められる例である。この庭は中世的外観の、言わば見るための農園であり、詩人は「装飾農園」を庭園の中の一部とし、風景庭園の中の不可欠な要素と考えているが、周囲との不協和音を避けるため、わざわざ離れた場所に置いている。

これに対し、イギリスの18世紀庭園論の基本的文献と言える『現代造園論(Observation on Modern Gardening, Illustrated by Descriptions, Illustrated by Descriptions)』(1770)において、著者のウェイトリー(Thomas Whately)は農園と“pleasure”のための部分と切り離れた庭園が多いことを批判し、園内における両者の融合が本来の庭園の姿であるとしている(Whately 161)。

遡れば、古代ローマにおいて貴族の別邸である郊外のヴィラは農業経営の拠点だったが、すでにそこでもヴィラの庭と農園をどのように結びつけるのかは所有者にとっての課題だった。スウィツァーも、「装飾農園」は古代ローマ時代の田園のヴィラに近いものであると言っている(Sayre 169)。ウェイトリー同様に庭園と農園の融合を目指したスウィツァーの理論とは異なり、実際に造られた「装飾農園」を見れば両者の融合は現実的には難しかったようであるが、一つの目指すべき理想ではあっただろう。この時期、将来に造園家となるイギリスの富裕層の子弟達の多くはグランド・ツアーでイタリアに長期滞在したが、そのイタリアにおいて例えばパドヴァの郊外にあるヴィラ・エモ(Villa Emo)のように、庭園の中心をなす立派な建物の中に農業関連施設を入れ込んだような「装飾農園」の原型とも言える例もあり、イギリス人ツウリスト達がそれを手本にした可能性も十分に考えられる<sup>2)</sup>。

プロのパターン・ブックの第二作は、その「装飾農園」の建築物の具体的で実際的な提案集である。『田園建築』と同様に、これもまた図面に解説を加えただけのパターン・ブックであるが、その解説は明らかに前作よりは詳しくなっている。中心になっているのは、『田園建築』でわずかに取り上げられていたコテージと農場家屋である。そこでも、それぞれの立面図が必ず示され、緑多い周囲の風景と調和するように描かれている。具体的には、エントランス・ゲイトやハハ、柵から始まって、家畜、鳥、犬のための小屋、森番や門番などの小屋などを経て、農場家屋、農民の村へと至る、様々な種類の農場関係の建物群が取り上げられている。そこでプロは、農業施設に装飾性を付加することによってあからさまな生産性を隠す、あるいは見方を変えれば、その対照的特性を楽しもうとしたとも考えられる。

「装飾」とはどのようなものかを確認するために、

いくつか具体例を見てみよう。プレート 5 (PLATE V、図2)は、馬小屋の図面である。「グロテスク、あるいは空想的な特徴」(3-4)を持つとされるその建物の外観は教会風にデザインされており、そこに付加された解説によれば、室内の壁には馬の頭蓋骨がつけられたタブレットがあり、馬の水桶は「大理石の石棺」を表していると言うように、内部もまた教会の様式が意識されている。

これと類似しているのは、より規模の大きい提案であるプレート 29 (PLATE XXIX、図3)で、「修道院の外観を持つ農場家屋と事務所(Farm House and

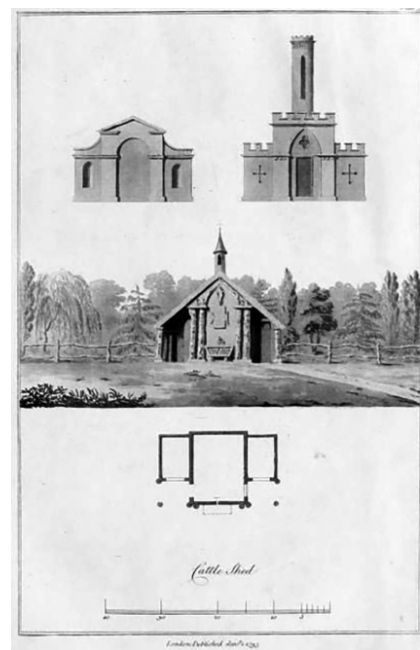


図2 PLATE V

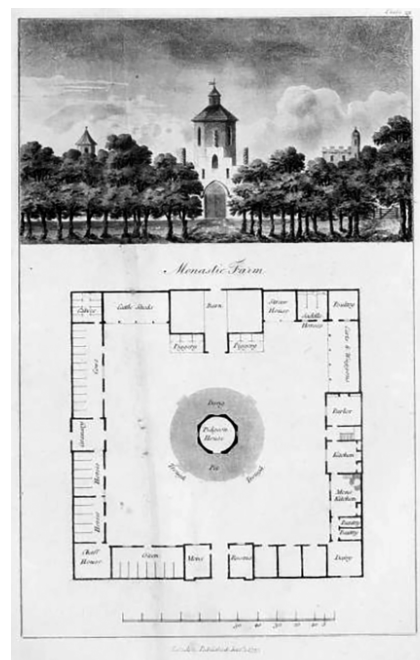


図3 PLATE XXIX

Office having the Appearance of a Monastery)」というタイトルが付けられている。このような修道院風の建物は、大規模な領地にふさわしい「古雅、威厳、壮麗(antiquity, consequence, and grandeur)」を有し、その結果、この建物は有用性と好ましい外観を融合したものとなる(10-11)。プレート36(PLATE XXXVI)も同じように「修道院」に似せた、羊や牛、馬のための小屋や干し草置き場などに汎用できる施設である。こちらは「古い建材を使った壁」で四方を囲まれており、立面図は明らかな廃墟風に描かれているが、これは明らかにピクチャレスク趣味の影響である(13)。

小規模な施設に目立つのは前作同様に円形の建物が多いことであるが、これも装飾性を重視した結果だろう。用途としては東屋や浴場などがあるが、中でも変わっているのはプレート12(PLATE XII、図4)の「羊飼いの小屋」である。特徴的なのは同じページの二つのプランのうち上の方で、一見してわかるようにキノコ型の建物になっており、明らかに装飾性が勝っている。

細部に目をやる時、装飾性の中で注目したいのは、建物に使われている柱の特徴である。その最も顕著な例として、プレート7(PLATE VII、図5)の「牛あるいは馬小屋」を挙げることができる。この小屋は「森から切り出した」木々で十二角形をなすように作られており、ほぼ円形に近いその建物の中心には一本の「大きな緑なす木」が聳え、屋根の上で豊かな枝を広げている(4)。十二本の柱が「荒削りの木々の幹」(9)をそのまま使用していることは図からも明らかで、同様の特徴は『装飾農園』で提示されている他のいくつかの建物のポーチの柱についても強調されているため一目瞭然である。

これらは、パストラルイズムの影響が18世紀半ばから認められる証左の一つだろう。建築物に森の木々をそのまま使用するという発想は、古代ローマの建築家ウィトルウィウス(Vitruvius)の建築論を範としたロージェ(Marc-Antoine Laugier)の「原始の小屋(primitive hut)」から来ていると考えられる<sup>3)</sup>。この「原始の小屋」を説明したロージェの『建築試論(Essai sur l'architecture)』は、1755年に英語に翻訳出版されている。フランスで出版された第二版の口絵には、柱、梁、破風のみからなる「原始の小屋」が描かれているが、これらは根を張った自然木であり、上部には枝葉が繁茂している。英訳版では、フランス版ほどアレゴリカルではなく、しっかりした四本柱の建物で屋根を支える柱だけが切り出した木の幹になっているが、これらの図版からもプローのこのパターン・ブックへの影響は明瞭であると思われる。



図4 PLATE XII

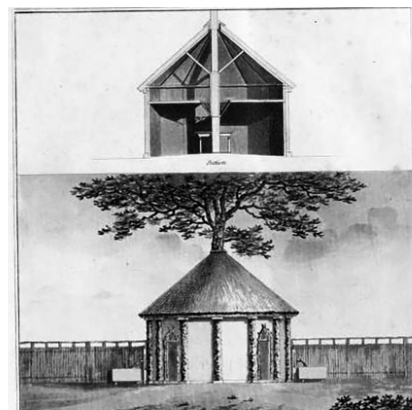


図5 PLATE VII

### 3.

プローの『装飾農園』は、時として過剰な装飾性の一方で有用性も忘れてはいないことも見落としてはならないだろう。特に、農園の中で不可欠な要素である農業労働者向けの住居の提案においては、実用性に配慮が行われている。プレート16(PLATE XVI、図6)の「合体した二つのコテージ」の立面図では、草葺き屋根で左右対称のコテージが描かれており、背後には森が見える。玄関扉は一つであり、平面図を見て初めてこの建物が前後に玄関のある二つの別のコテージが一つに合わさったものであることがわかる。つまり、前後どちらから見てもシンメトリーを保つように美観を尊重して設計されているのである。しかし、解説からは、二軒をまとめた理由は隣人が病気の時に助け合ったりして互いに「安心と影響」を交換できるという配慮からであることが読み取れる。このコテージは、「こざれい」で「規則的」であって、紳士の領地の中では「気持ちのよい」「統一性」を持ち、曲がりくねった導入路のどこからも「好ましいもの(agreeable objects)」に見えるとされているように、その外観が重視された建物である。しかし、上述のようにそこには別々の世帯が住むことが想定され、相互の触れ合いは領主の「慈悲心」に訴えるとされていることから、この建物は領主自らのための装飾用コテージではなく、実際に労働者が住むために考えられたことがわかる。

(7)。ここには、美観のみならず住居としての有用性が求められているのである。

建築群の図面は徐々に大規模になってゆき、農民達のためのプレート33 (PLATE XXXIII、図7)「村の計画」に至る。人為的な村全体の計画案としては初めてのプロのこの構想は、次のように解説されている。

村の中心を公道が通っているこの計画は、シンメトリーと有用性を統合することを意図している。建物の規模は、労働者用、その家族用、独立自営者用

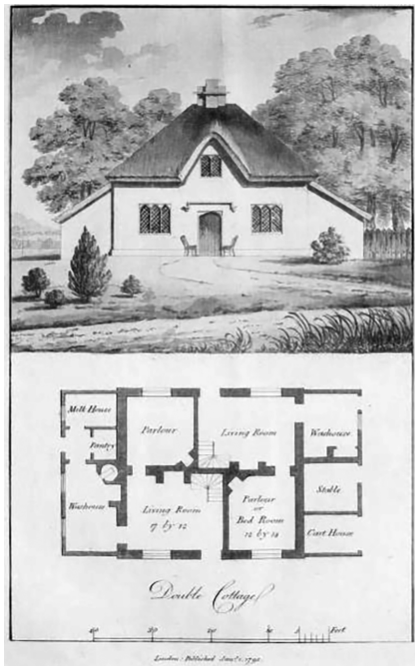


図6 PLATE XVII

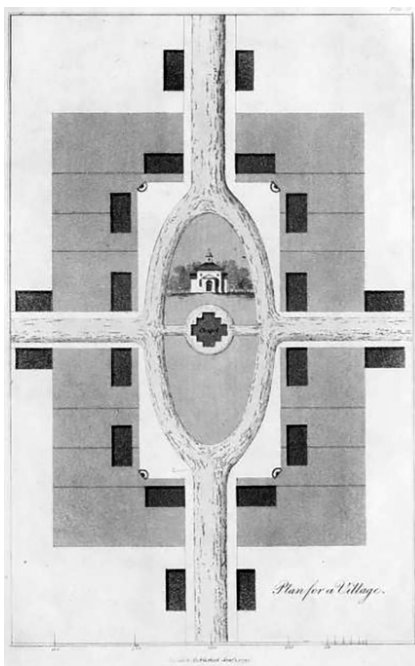


図7 PLATE XXXIII

と、どのようにでも変更可能である。二軒一棟にして、各建物に庭を付けることを提案する。中心には楕円形の土地を確保して、その真ん中に教会か礼拝堂を置けば便利でかつピクチャレスクになるだろう。住民の利便のために四隅にポンプを設置する。十字に交差する道路にはどのように建物を配置してもよいが、全体の統一性は保持すべきだ。(12)

これは領地内に建設することを想定した一種のモデル・ヴィレッジの計画案である。図面では、村を十字に貫く道路の交差する中央に楕円形の広場があり、その真ん中に教会が建っている。説明の通り、また図面からも家々は現代の郊外型二軒一棟住宅 (semidetached house) そっくりで、コテージの背後には各々庭が付いている。また、住民が使用するためのポンプは、きっちりと中央の広場の四隅に配置され、直角に交わる二本の主道と共に「全体の統一性」を与えている。

村のデザインは「シンメトリーと有用性を統合することを意図している」と書かれているが、これはプロが村の美観と有用性の両方を重視して村の創設を考えていたこと、そして、前作同様に建物の規則性は美観を生むと考えていたことを意味していると考えてよいだろう。一方で興味深いのは、中央に置かれた教会が「便利でかつピクチャレスク」であると書かれていることである。彼はここでも村の景観美と有用性の両方に配慮しているのであるが、モデル・ヴィレッジにピクチャレスクの視点を導入しようとしていることは注目に値する<sup>4)</sup>。そして、ここでプロは規則性を重んじるパラディオ様式と規則性を否定するピクチャレスクの、相反する二様の美意識を同時に使おうとしているのである。プロの提案するこのモデル・ヴィレッジ構想は、以上のように美観・有用性ともに配慮をした計画案であると言えるが、これは『装飾農園』というパターン・ブック全体を貫くポリシーでもあるだろう。

#### 4.

プロの提案にはかなり奇抜な発想によるデザインの建物も含まれてはいるが、その実現を可能にしたのはフランスから入って来た「練り土レンガ」(pisé)だった。『装飾農園』の「序文」でプロは、その提案が「単なる空想のスケッチ」ではなく、極めて現実的であって実際に建てられているものもあると主張する。そして、その実現性を説得すべく「練り土レンガ」の効用を力説している。その説明によれば、まず「練り土レンガ」は強固な建築を可能にするので、高層の建物にも使用できる。また、材料は土であるので安価であり、そのうえ形を変えやすいので自由なデザインが可能である。また、工法は単純で未熟練の労働者でも建てる

ことができ、適切にレンガを組めば、外部からの衝撃に強い。早く乾くので、すぐに住み込んでも湿った壁に困られることはない。つまり、プローの『装飾農園』は見ても楽しむための本ではなく、実際に造園・建設することを勧める意図で出版されているのである。

プローの建築は、以上で見て来たように、有用性と美観の両面を考慮している点がその特徴である。農園の本質的な部分は実質的な生産性であるが、建物的美観、即ち「装飾」性も極めて重要であるというのが『装飾農園』における彼の基本方針である。プローがパターン・ブックを出版する少し前にロイヤル・アカデミーが設立されたが、それに際して行った「第1講話(Discourse)」の中でレノルズは、「イギリスのような帝国がその偉大さにふさわしい装飾を余りに長く欠いていた」ことが設立の背景にあるとしている。つまり、ロイヤル・アカデミーの目的はイギリスの「装飾」を洗練させることなのである。また彼は、「第7講話」においては詩を他の文章と分かちのは詩の装飾性だとして、そこでも「装飾」の意義を評価している(Cf. Reynolds 5-6, 307)。ギルピンも『ワイ川観察紀行』において風景の多様性がピクチャレスク美の本質であるとした上で、その多様性を高めるものを「装飾」と呼んで、それを「地面、森林、岩、建物」の四項目に分類してそれぞれ詳細に解説した(10)。これらの例が示しているように、「装飾」は本質的な部分ではないが、本質を引き立たせるのに不可欠だというのが、プローの時代に共通する認識だった。

プローの『装飾農園』における「装飾」とは、一つは農業用の建物を教会や修道院などに似せて外観を楽しむようにしたことだが、もう一つの点は周囲の景観の中に建物を位置付けて一つの調和した風景として見るということである。『田園建築』だけではなく『装飾農園』における立面図の全てにおいて、プローは木々や草、雲などと言った背景や前景を書き込んでいる。「村の計画」におけるプロー自身の解説を待つまでもなく、その発想の源がピクチャレスクの風景だったことは言うまでもないだろう。

ピクチャレスクの流行は19世紀に入ると下火になってゆき、一過性のものと考えられることが多いが、建築の分野ではその美学は引き続き尊重された。その理由は、観光や美術などといった趣味の分野とは異なり、実際に住むという現実的な分野においてピクチャレスクが取り入れられたことにあるのではないだろうか。日常性の中に美を探究するという発想は今日まで継承されているが、その出発点の一つが「装飾コテージ」とこの「装飾農園」だったと言える。左右非対称の不規則性を強調したヴィクトリア時代のピクチャレスク建築と比べると、プローの提案はシンメトリーを重視する古典的な趣向が色濃い。そこに時代の変遷を見いだすことは容易だが、ピクチャレスク美学を建築にお

いて初めて実現可能なものとして具体化したという点で、プローのパターン・ブックは画期的だったと言えるだろう。

## Notes

- 1) この円形の建物は、のちにワーズワスによって「胡椒壺」(“pepper pot”)と呼ばれるなど、プローの意図に反し、周囲の景観に合わない等の理由で酷評された。
- 2) イギリスの建築にも非常に影響の大きかった16世紀のイタリアの建築家パラディオは、自分の故郷の町パドヴァの北郊にあるヴェネチア貴族エモ家のヴィラ・エモ(Villa Emo)を訪れて次のように描写している。“In FANZOLO an estate in the Trevigiano three miles away from Castelfranco, is the building placed below belonging to the Magnifico Signor Leonardo Emo. The cellars, the granaries, the stables and the other farm buildings are on either side of the owner's house [casa dominicale], and at the end there are dovescotes that are useful for the owner and add beauty to the place; one can move under cover throughout it, which is one of the principal features required in a house on an estate, as has been pointed out above. Behind this building there is a square garden of eighty campi trevigiani, through the middle of which runs a stream that makes the site very pretty and delightful. (Palladio 133)
- 3) Cf. Rykwert, Chap. 5.
- 4) プローのパターン・ブックは広く読まれ、その影響は大きかった。中でも彼のモデル・ヴィレッジ案は、村の中における景観への配慮においてアンウィン(Raymond Unwin)らのハムステッド・ガーデン・サバーブ(Hampstead Garden Suburb)の計画に影響を与えただろうということを、ダーリーは指摘している(Darley 22-23)。

## Bibliography

- Archer, John. *The Literature of British Domestic Architecture 1715-1842*. Cambridge, Massachusetts, and London: The Massachusetts Institute of Technology, 1985.
- Darley, Gillian. *Villages of Vision*. London: Paladin, 1978.
- Gilpin, William. *Observations on the River Wye, and Several parts of South Wales, &c. Relative Chiefly to Picturesque Beauty, Made in the Summer of the Year 1770*. London: T. Cadell Jr. and W. Davies, 1783.
- Macarthur, John. *The Picturesque: Architecture, Disgust and Other Irregularities*. London: Routledge, 2007.
- Palladio, Andrea. *The Four Books on Architecture*. Trans. Robert Tavernor and Richard Schofield. Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 2002.
- Plaw, John. *Rural Architecture; or Designs, from the Simple Cottage to the Decorated Villa*. London: I. and J. Taylor, 1785.
- . *Ferme ornée: or, Rural improvements : a series of domestic and ornamental designs, suited to parks, plantations, rides, walks, rivers, farms, &c. : consisting of fences, paddock houses, a bath, a dog-kennel, pavilions, farm-yards, fishing-houses, sporting-boxes, shooting-lodges, single and double cottages, &c. : calculated for landscape and picturesque effects*. London: I. and J. Taylor, 1795.
- Rykwert, Joseph. *On Adam's House in Paradise: The Idea of*

*the Primitive Hut in Architectural History*. London:  
Distributed by Academy Editions, 1972.

Sayre, Laura B. "Locating the Georgic: from the ferme ornée  
to the model farm" . *Studies in the History of Gardens &*

*Designed Landscapes: An International Quarterly*. Volume  
22, Issue 3, 2002.

Whately, Thomas. *Observation on Modern Gardening,  
Illustrated by Descriptions*. London: T. Payne, 1770.

